

しむる事なり、偕かく言へばとて妄に奇兵の働をのみ貴ふ事もなし、元來正兵にて堂々齊々として挫くべき事なれども、或は人數の多寡又は敵方猛將、謀者等にて堂々齊々にのみ擬作難き事もあるなり、是奇を用ふる所なり、既に奇を用ふる上は己れの奇正を敵に見透かされざる事、是無形を尊ふ所なり、神武帝の軍立にも陰軍、陽軍あり、これ全く奇正を用ゐられたるなり、可貴可思。

第四卷終

海國兵談 第五卷

夜軍

夜の戦は陣所へ寄るを夜討と言ひ、城へ寄るを夜込と云ふ、互に陣を取て、夜出て戦ふを夜軍と言ふは世上の言ひ習なり、其中夜討と夜軍とは少し許り異なり、夜討と夜込とは大なる差別なし。

夜は敵の様子も分明ならず、足場の善惡、旌旗の相圖も、慥に見分難く、敵味方も定かに知れ難きものなれば、諸事不都合なる故、十に八九は夜の戦をば好まざるなり、然れども、夜討は勝難き敵に勝つともあるものなり、然しながら約束十分に調はざれば、只彼是とひしめく許にて戦も仕難きものなりと言へり、此故に相圖の鳴物、相印、相詞等を能々呑込ませすべし、先づ夜戦の大趣意は旌旗の相圖は見へ難き故、鳴物の相圖を厳しく定むべし、鳴物の相圖とは東西南北の鳴物を定め教ゆる事なり、例へば拍子木を東の鳴物、太鼓を南、貝を西、喇叭を北と定むるが如し、平生の操練に此趣を能く呑込ませ置て、事に臨み間違のなき様すべし、此外松明火薄等工夫次第定む

べし。

夜戦は人数の編伍を慥にすべし、編伍慥ならざる時は引取る時、敵より紛れ者附纏ふて来る事あり、此紛れ者を防く術は編伍正しきに非れば叶ひ難きなり、和田、楠は夜討より歸りて、立すくり、居すくりと云ふ事をなして敵の紛し者を見出したる事あれとも、人数組正しき時は立すくり、居すくりにも及ばずしてまぎれ入るべき様なしと知るべし。

夜戦は人数を二十五人宛幾組も仕立て、各一組切の働を爲さしむると甚便利なり。夜討を爲せは其の懸りたる所よりは歸らず、脇か裏かへ切抜てかへるべし。

夜討、夜合戦ともに戦場より一町許退へて忍び、備を一備も二備も出し置くべし、萬一味力敗北して敵追來らば、已か備の前を敵勢の半過ぎたる時、切懸りて踏崩すべし、其時引來る味方も返し會て狭み討つなり。

夜軍の習は前鐵砲の音を相圖に働き入べし。

夜討は何方より入て、何方へ抜けると言ふ事を能く諸人に吞込ますべし、歸るべき道は迎備を出し置き、又歸るましき方へは松明等少し出して、敵の氣を疑はしむる事あるなり。

夜の印は白色を用ゆべし、胴卷、腰卷、鉢卷、袖印、鞘卷等は心次第なるべし

夜討は聲を揚ぐる事を禁ず、若し聲を揚ぐる者あらば即座に切捨つべし、此故に古は枚を啣むと云ふことありて、楊枝の大きな木を人毎に啣ませ或は馬の轡を結びたる事あるなり。

夜討の習は敵陣へ入ると均しく、先づ大將の座を目懸て切込べし、其次は敵の馬を切放して騒動させ、其次は早く火を懸て焼立つへし、勿論一所にて働かず、組合次第十人、二十人づゝ所々にて働くべし、首は切捨てたり、但し大將の首と見ば捨る事なかれ、太刀、具足までも分捕して歸るべし、偕又馬を切放し、火を懸る事を人々心懸る時は、接戦の働きになるものなり、然る故に切放し、火附等の役は戰士の外に三四人を一組として、五組も、十組も、二十組も備次第に用ふべし、右の者共馬を放し火を懸け終らば、是も戰士と等しく戦ふべし。

夜討の出立は飛道具を多く用ゐず、手詰の働きを第一と心懸べし。敵を追崩さば長追するとなかれ、鐘を聞き次第總戰士、足を止むべし、偕旌馬印の代りに松明十本將几に振立べし、是を目當に總軍一處に集るなり、勿論陣營を乗取たるに於ては、敵陣に有合ふ兵器、諸道具手に懸り次第取來るべし。

柵を嚴しく振ひたる所は、鋸にて土際より引切り推倒して込入べし、此働は時宜に因て晝もなすべきなり、但し晝は仕寄道具を用ゆべし。

夜討の時、火附役の者は、乾きたる柴、萱等四五把づゝ持行きて、陣營の中、火の付易き所を仕立て、彼の柴を積み重ねて火を附くべし、火を附るには火船の條に出せる焼薬込めたる大薄の花火を用ゆべし。

夜討をなすべき圖に四つ在り、敵の折着の夜、終日合戦ありし夜、大風雨雪の夜、敵方吉凶に付て騒動ありし夜なり、猶此外臨時に考て討べき圖を計りて、神速に討懸るべし。

夜討に用ゆべき器械左に記す。

階子は、是は塀、堀或は、長屋等を越すに用ふ。

大槌、是は營門等を打破るに用ふ。

大鋸、是は柵、塀、柱等を引切に用ふ。

熊手並大鳶嘴、是は乗越の具にも用ゐる或は力戦にも用ふ。

柴、萱、大薄の花火、是は火附の道具なり。

右夜討の大略なり、猶工夫あるべし、此以下夜討を防ぐべき條々二三を記す、猶工

夫丁簡を加へて、防ぎの手たてをなすべし。

夜討は空隙を討なり、已れに空隙なき様にする事は、第一物見を能く用ゆべし、物見密なる時は、敵の寄り附くべき様なし、其時は軍法、約束正しくして、一度夜討の寄來る相圖ある時は、營中悉く防ぎの用意をする事を精しく教へ置くべし、其次は營中の戦士の中にて已れは戦はずして松明の役と言ふ者を定め置くべし、夜討來るの相圖ある時、已れは戦はずして早く松明を點し、面々の小屋の前、並に營中の小路々々を照して營中を白日の如くに爲すべし、總じて夜討は暗に乗じて少人數にて蹴立るものなり、然るに營中白日の如くならば、決して夜討に苦しめらるる事なかるべし、是夜討を防ぐ第一の心懸なるべし、是等の事を能く得心せば、妄に夜討には逢ふまじきなり、此外猶工夫を附て防禦の術をなすべし、將帥たる人能々心を用ゆべし、總て夜討は不慮の大功をなすものなれども、齊の田單の燕の軍を破りしと、加藤清正の朝鮮に於て明の二十萬騎を手勢八千にて踏破りし程の激しき夜討は、類少なき事なるべし、これを夜討の Handbook と云ふも可なるべし。